

# ぎふの教育

岐阜県教育懇話会  
〒503-0023  
大垣市笠木町 229-5  
(0584)91-2478  
口座番号 00800-3-5390

網 領

われわれは歴史と伝統を尊重し、日本にふさわしい中正な教育を推進する。  
われわれは教養と品位の向上につとめ、真摯愛の精神とともに、明るく純粋な教育を研修する。  
われわれは個人の自主尊厳を尊重しつつ、政治的中立を厳守し、主体性を堅持する。

た旧宮家の男子孫が養子として皇室に入る

## 巻頭言

### 「皇族数の確保」前進への論点整理

京都産業大学名誉教授 所 功

新年早々の衆議院選挙によって高市早苗首相のもとで自民・維新の与党が大勝した。これからは政府と国会で早急に取り組むべき課題が山積している。その一つが「皇族数の確保」対策にほかならない。

この問題は、様々の事情によって長びき、ようやく令和六年(二〇二四)早々から政府案が国会に諮問され、衆参両院で全党・会派の意見聴



取を重ねてきたが、まだ合意形成に至っていない。そこで、この政府案に基づいて、必要な論点

を整理しながら、可能な限り整合性のある見解の提示に努め、ご参考に供したい。

政府案の立場は、令和に入ってから皇陛下皇長子の徳仁親王が「天皇」に即かれ、また皇次子の文仁親王が「皇嗣」として立たれ、そのもとに成年近い悠仁親王が居られることを重視する。従って、皇位は現行の皇室典範どおり、男系「男子」が二代先まで継承するとみなして、本命の「皇位継承」問題には立ち入らないことを前提としている。

それにも拘わらず、一方で皇位継承は「男系」を唯一の原理と信じて、「女系天皇」どころか「女性天皇」も絶対に認め難いとか、他方で皇族も一般国民と同じく「男女平等」とみなして、人気の高い「愛子天皇」を実現すべきだ、などと声高にいうのは、共に前提を軽視し誤認していることになろう。

その政府案の要点は、皇室の公的活動を分担することができる「皇族数の確保」に絞って、まず①皇族女子が結婚後も皇室に留まりうるようにすること、また②戦後皇籍を離れ

りうるようにすることである。

ただ、①では、皇族女子を当主とする新宮家を認めながら、その夫も子も皇族にしないことを条件としている。また②では、旧宮家の子孫が養子皇族になれるとしながら、皇位継承の資格は認めないことを条件としている。

しかし、このような①の条件は、冷静に再検討する必要がある。まず①で新宮家ができて、皇族身分の女性当主と一般国民のままの夫や子が生活を共にすることは難しい(その夫や子たちは皇族費を受給できず、皇族としての公務もできない)とみられるからである。

そうであれば、「皇族数の確保」という当面の目的に照らして、①案の条件を見直し、皇族女子と結婚する一般男子も皇族とする必要がある。それは皇族男子と結婚する一般女子が后妃として皇族になるのと同じことである。念のため、その男子(入夫)は、一般の出身であるから、皇位継承の資格を有しない。従って、①案により皇族女子は結

婚して新宮家の当主になっても、現行典範の定めている「男系男子」が健在な限り、皇位継承の資格を認めないと決めておけば、いわゆる女系天皇は生じえない。

現に②案の条件でも、養子となる皇族には継承の資格を認めないとしているから、皇族の中に資格の有る方と無い方を分けることは法的に問題ないであろう。

むしろ、皇室の現状を正視して最も必要とみられるのは、皇族として皇室に留まる女子のうち、内廷の愛子内親王が御両親の天皇・皇后両陛下を身近で支えられ、また皇嗣家の佳子内親王も御両親と弟君を助けられることである。ちなみに、三笠宮家では、孫世代の彬子女王が当主となり同家を担っておられる。

(令和八年二月十日記)

#### 〈付記〉

日本学協会『日本』四月号に、拙稿「天子無姓の認識と意義」が掲載される。

その要点は、日本の天子(皇室)には、中国王朝のような父系(男系)を絶対視する姓氏(今日の名字)がない。従って、皇位継承者は、皇祖以来の「皇統」に属する皇族であればよく、いわゆる男系も女系もないのである。

『日本書紀』が語る天下分け目の原点

壬申の乱を勝利に導いた美濃の地勢と動員力

氣比神宮権禰宣 朝倉正樹

と皇位を引き継ぐ方という表現であった。ところが天智天皇十年(六七二)、天智天皇が崩御される年に大友皇子を太政大臣に任命している。太

政大臣は官位の最高位であり、皇位継承者と認められたのである。

これを聞いた大海人皇子は皇位を継ぐのは自分ではないと知った。その頃の世継ぎは子より兄弟を優先するという暗黙のルールがあったので、相応しいのは大海人皇子であった。

しかし、天皇は蘇我赤兄臣(あかえのおみ)や中臣金連(なかとみのむらじ)などの有力な豪族を大友皇子の配下につけて後継者としたのである。

大友皇子の母伊賀采女宅子(いがのうねめのやかこ)は伊賀の豪族の娘であるが、あまり官位は高くなかった。それが臣下の不評をかったとも言われている。

その頃、天智天皇は病に罹っていて、病床へ大海人皇子を呼び寄せた。天皇は、自分は病が重いので、後のことは任せると持ちかけたのだが、皇子は自分も病と称して断っている。

皇后の推薦もあるので皇位は大友皇子に継いでもらい、自分は出家し仏道に励みたいと述べている。天皇は

それを認め、二日後に大海人皇子は吉野に発った。

これは『書紀』の「天智天皇紀」に書いてある。そして「天武天皇即位前紀」にも同様のことに加えて、大海人皇子の心中も加えている。天智天皇は蘇我臣安麻呂を通して皇子を呼ぶのだが、安麻呂が「意(こころ)有(しり)ひて言(のたま)へ」と、注意をして答えなさいと助言し

ており、大海人皇子は「茲に隠せる謀(はかりごと)有らむことを疑ひて慎みたまふ」と慎重に応じたことが記されている。大海人皇子は天智天皇の言葉に乗ると、乙巳の変の時のように謀反の疑いで排除されるのではと考えたのだと思われる。

天智天皇側からすると、大海皇子に皇位を継ぐ意思があるのか、大友皇子の地位を脅かす気持ちはあるのかを確かめるつもりだったかも知れないが、大海人皇子は無難に乗り切った訳である。

天智天皇十年十一月十七日、大海人皇子は吉野へ旅立つのだが、左大臣や右大臣、大納言などが宇治まで見送っている。その時にある人が、「虎に翼を着けて放てり」と言ったと『書紀』に書かれている。大海人皇子ほどの実力者に自由を与えてしまった。近江に留めて監視しておればよかったと言うのである。近江朝

が何らかの手をうってもおかしくなかった。

実際に、六七二年の五月、吉野の大海人皇子の所へ近江朝廷側が不穏な動きをしているとの報告が入った。それは陵墓を作るのに人夫を集めておけということだったが、人夫に武器を持たせていたのである。また吉野へ食料を運ばないようになっているといった情報もあった。

六月二十二日、大海人皇子はそれらの動きが朝廷側の戦争準備だと感じて、挙兵を決意した。そして、村国連男依(むらくにのむらじ・おより)、和川部臣君手(わにべのおみ・きみて)、身毛君廣(むげつきみ・ひろ)の三名を美濃へ遣わし、不破道を塞ぐよう命令している。

この三名はいずれも美濃国にゆかりの豪族であり、安八磨郡(あはちまのこほり)の湯沐令多臣品治(ゆのうながしおほのおみほむじ)に計略を話して軍を動かせるようにし、不破を押さえよと言っているのである。

安八磨郡は今の大垣の大部分と安八町、池田町を含む広い範囲をさしている。湯沐令は皇族が湯浴みをするための費用を賄う領地のことで、美濃には古くから天皇・皇族との関わりがあり、名代・子代が多数おかれていたのである。

大海人皇子を支えた豪族に大海氏



日本書紀 天智天皇 大友皇子 伊賀采女宅子 大海人皇子 弟(ひつぎのみこ)と 東宮大皇子(ひつぎのみこ)

がいるが、海部氏と同族で愛知県に海部郡があるように、そこまで勢力範囲があったと考えられる。こうして大海人皇子を支えた有力な豪族が美濃と尾張に多数いたのである。

二十六日には密使の一人村国連男依から不破を塞ぐことに成功したとの報告があった。

大海人皇子が指示をしてから数日のうちに成し遂げられているので、準備をしていたとも考えられるが、その軍勢は三千人であったと言う。

二十七日には大海人皇子の一行が不破へ入り、野上に行宮を設けている。そこへ尾張国司が二万の軍勢を率いて帰順してきた。

挙兵してからここまでたった五日間くらいで、近江軍と対等に戦えるだけの兵力になっている。それは美濃の豪族三名と現地にいる多臣品治が速やかに事を進めたからだと考えられる。

なかでも品治は大海人皇子の信任が厚く、情報をあげては意見をしている。日頃からの訓練も出来ていたのかも知れないが、素早く動いている。安八磨郡の豪族の働き、すなわち大垣の人々の働きが大きかったのである。

ではなぜ大海人皇子は不破を塞げと言ったのか。それは不破が古来より交通、軍事の要衝であったからである。

ある。東山道を進む軍勢は必ず不破を通らなければならぬ。ここを押さえておくことで、東(あづま)の国を一手に収めることができる。

村国連男依は各務原の豪族で、現在、各務原市にある村国神社と村国真清田神社の祭神として祭られている。二社とも延喜式内社(平安時代の『延喜式』に記載された朝廷公認の神社)であり、『和名類聚抄』(平安時代の百科事典)の美濃国の部に村国郡とあるので、そこを本拠としたのであろうと考えられる。

身毛君廣は美濃国武義郡(現在の関市・美濃市・山県市あたり)の豪族で、景行天皇の皇子大碓命(日本武尊の兄)がその国造の祖大根王の女弟比売と結婚し、生まれた押黒弟日子王が身毛君らの祖先と言われている。

多臣品治の多氏は大和の豪族だが、こちらの方にも勢力を張っていたと思われる。『書紀』の少し前にできた『古事記』を撰上した太安万侶はその一族である。

以上の四名がいずれも美濃にゆかりのある一族であった。

大海人皇子は不破の野上に行宮を設けたが、『書紀』の後に作られた『続日本紀』に、尾張国の豪族が別邸を提供したとある。

この近くに伊富岐神社があるが、

この付近の豪族であった伊富部氏の先祖を祭っていて、尾張の豪族と同じ祖先をもっている『新撰姓氏録』(平安初期に作られた古代士族名鑑)に書かれている。つまり同族なので野上に別邸を持っていたのであろうと思われる。

伊富部の伊富は伊吹山の伊吹と重なるが、「火を吹く」と音が重なることから製鉄に関係していたのではないかと考えられている。この近くには南宮大社があり、製鉄の神様をお祭りしている。また金生山というかつて鉄鉱石を産出した山もある。したがって、この地域は交通の要衝であるだけでなく、武器の製造もできたのである。こういうこともあってこの近辺に湯沐を持っていたと考えられる。

大海人皇子は六月二十七日に不破の野上に入り、そこから近江の方へ進軍していくわけだが、七月には四つの方向に向かっている。一つは大和へ向かい、品治は別働隊として三千人を率いて今の伊賀町あたりに駐屯した。

大和でも戦いが始まって、もともとは近江軍であった大伴吹負(おおともふけい)は、坂上熊毛(さかとうのくまけ)らと謀って近江軍を混乱させ、飛鳥を占拠している。

こうして大和と不破の両方から近

江を攻めることとなった。近江軍は大海軍の勢いに押されてか、内部で混乱が起こり、投降者も出てきた。

七月二十二日には大海軍は瀬田川まで迫り、近江軍はここを越えられず敗退するところまで追い詰められた。近江軍は瀬田川にかかる橋の板をはずして大海軍の進撃を食い止めるようにした。しかし、大海軍の勇敢な兵士に渡られて、近江軍は敗走した。

七月二十三日に大友皇子は自害し、二十六日にはその首実検のため野上行宮へ送られている。

大海人皇子はそれまで野上の地を動かず、戦況を見ていたが、九月になつて飛鳥京へ凱旋している。

この乱の勝敗は初動で不破を塞いだ時点で決していたと思われる。不破から安八磨郡にかけて軍事上重要な土地であったからである。

大海人皇子が戦いを決意した時はわずかな人数であったが、美濃と尾張の豪族を掌握し、その豪族たちが短期間に兵力をまとめて動けたことが天下分け目の勝利に結びついた。

このように千数百年前の出来事が詳細に分かるのは、『日本書紀』という日本で初めての正史が残ったお陰であり、大切に読み継ぎたい。

※ この講演録は三月二十二日の総会後に行われた日本学講座の抄録である。文責日

教育情報

生成 AI の普及と  
学校教育での活用について

編集部

「AI」とは Artificial Intelligence の略で「人工知能」の意味である。特に人間のように考えたり判断できる知能をもったコンピュータをさす。現在、その技術は医療、工業、農業など中広く実用化されている。

また、「生成 AI」は、文書作成、画像・動画作成、音声・音楽制作など一層高度な能力をもち、令和二年十一月、アメリカの OpenAI が公開した ChatGPT を代表とする人工知能である。

「AI」との違いは「新しいコンテンツ（情報内容）」を作成することができるところにある。ChatGPT は対話型で、文字や音声で指示すると、文章や画像ばかりでなくコード（プログラム）の命令を表す符号や形式）を作成することもできる。

ChatGPT に「知足安分はどんな意味か教えて」と入力すると、  
知足安分（ちこそくあんぶん）は、自分の境遇に満足し、欲をかきすぎず、身のほどに応じて安らかに生きることを意味する四字熟語です。分けて見ると「知足（ちこそく）... 足るを知る。自分に与えられたも

のに満足し、必要以上を求めないこと。安分（あんぶん）... 自分の立場や境遇をわきまえて、心を安らかに保つこと。つまり全体として、「今の自分の状況に感謝し、欲望を抑えて心穏やかに暮らす」という生き方を表します。同じ意味を持つ言葉としては「足るを知る」「分をわきまえる」「慎ましく生きる」などがあります。

と、会話しているかのように回答してくれ、しかも行き届いている。また画像でも、「夕日の浜辺を歩く人々を絵にして」と求めると、「夕日の海辺の散歩」と題した左のような図を返してくる。指示内容をよく

らませた想像以上の画像である。これは簡単な例であるが、会社の商品開発のアイデアを聞いたり、過去の物価と賃金の変動をグラフに書かせたりと、高度で複雑な内容でも指示にそった結果を出してくる。



AI が生成した図「夕日の浜辺の散歩」

そのため企業では人手不足を補ったり、調査研究の補助として活用が広がっているの

うした生成 AI のサービスは ChatGPT の他に Claude や Gemini などがあり、それぞれ長文の要約に強いとか、検索の能力が高いなどの特色がある。その使用目的にそって一般企業だけでなく、役所や学校でも使用されてきている。

そのような中、令和五年五月、文科省は「ChatGPT 等の生成 AI の学校現場の利用に向けた今後の対応について」という通達を全国の都道府県教育委員会等へ出している。現場での広がりに対して、リスクもあるのと、注意喚起をしている。

ついで同年七月、文科省は「初等中等教育段階における生成 AI の利活用に関するガイドライン Ver1.0」を示し、同年十一月には、同じく「Ver2.0」を発表し、学習指導要領で求められている情報活用能力の育成の一環として生成 AI を積極的に活用することを求めている。

矢継ぎ早に通達やガイドラインが出された理由は、政府が令和元年に「総合イノベーション戦略会議」の報告書にも現れている。その中で「我が国は、現在、人工知能技術に関しては、必ずしも十分な競争力を有する状態にあるとは言いがたい。」と我が国の後れを認めているように、国を挙げて推進する必要性に迫られてい

るのであろう。

世界的にはアメリカを始め、EU、英国、中国、シンガポールなどで AI の開発に国家として力を入れており、どの国もこれからの競争力の源泉と捉えているのである。

我が国も令和七年十二月、初めて「人工知能基本計画」を閣議決定し、AI の開発と利活用に関する国家戦略を策定し、そのための予算も現在の国会に上程されている。

確かにこれからの時代は情報技術をもった国が世界を支配する可能性があり、政府が国家再生を賭けているように、我が国としても全力で取り組まねばならないであろう。

しかし、こと学校教育に関しては慎重な対応が必要である。それは生成 AI に次のような課題があることが分かってきているからである。

- ・ 誤情報や偏った出力の可能性
- ・ 著作権や倫理的な問題
- ・ 過信による判断ミス

そして、それ以上に子供たちが学習をして能力を伸ばすことに反って妨げになるのではとの疑念もある。

コンピュータが解答してくれたのだから正しい。辞書を引いたり、図書を読んだりするなどの手間が省けて楽。と子供は受け容れてしまう。学校教育への導入は、時期と方法を十分に検討する必要がある。